

『泊秦淮』 杜牧

滅びし南朝への懐古

この詩は晩秋の一夜、杜牧が秦淮に舟泊りした時の作。秦淮は秦代に造られた運河で南京市街の南部を西方に流れて長江に注ぐ川。その沿岸は水運の基地として繁華な一角を形成していた。

この一帯、金陵には、かつて約三〇〇年間南朝時代の都であった建康城（今の南京）は、華麗な貴族文化を誇っていたが、陳を滅ぼした隋によって徹底的に破壊され、唐代には昔日の面影もなく一地方都市にすぎなくなっていた。しかしそれでも秦淮の一帯だけは商業活動の中心地として、河岸には商家や妓楼などが立ち並び、それなりの繁栄をとどめていた。

南朝の滅亡した都を詠ったこの詩は南朝への懐古や哀れさばかりでなく、杜牧の生きた晩唐の時代、王朝の腐敗、混乱が隠しようもなく明らかであり、そのような大唐の残り火と南朝の亡国とを重ね合わせていたのだろうか。

恨みと甘みな哀愁がこめられた「泊秦淮」の詩は杜牧の作った絶句の中で傑作中の傑作と言われている。

古都の二面性「歓楽と亡国」

秦淮に泊す 杜牧

煙籠寒水月籠沙 煙は寒水を籠め月は沙を籠む

夜泊秦淮近酒家 夜秦淮に泊して酒家に近し

商女不知亡國恨 商女は知らず亡國の恨み

隔江猶唱後庭花 江を隔てて猶唱う後庭花



夜霧が冷たい水面にたちこめ

月の光は白々と

砂を照らす

今宵秦淮に舟泊

り青楼が近くに

あった

陳国の亡国の恨

みの歌とも知ら

ず

川の向こうで今

もなお「玉樹後

庭花」の曲を

歌っている。

玉樹後庭花

陳の後主、陳叔宝が作った歌辞。

(七言六行詩で五行目、六行目抜粋)

妖姫臉似花含露 妖姫臉は花の露を含むに似て
玉樹流光照後庭 玉樹光を流して後庭を照らす

妖姫：美しい姫 後庭：後宮

陳の後主は張姫と貴人をひきつれ、いつも遊宴していた。その中で新詩を賦させ、一番良い詩に曲をつけ宮女に歌わせた。最も有名だったのが「王樹後庭花」である。

政治よりも歌舞音曲にふける日々、人々は陳の滅亡を予感するうちに長江から攻めてきた隋の大軍になす術もなく国を亡ぼされ、その予感は現実となった。

二十六歳の若さで進士に及第してエリート官僚の途を歩みだしたものの、ものにこだわらない性格と苦勞知らずが災いして、自負していたほど出世できなかつた。

そのかわり二十代後半から三十代にかけて江南の美しい

杜
舎
人



江南の風流公子

自然、華やかな街、又酒、歌、遊びにふけり、かなり気ままに青春を謳歌した杜牧にとって江南は忘れがたい土地であつただろう。

エピソード「揚州の夢」

「十年一覚揚州の夢 贏得たり青樓薄倖の名」(当時遊びほうけて揚州の歡樂の夢がさめた今日、もう十年の年月がたつてしまつて、後まで残つたのは妓樓の遊蕩児の名だけである) 杜牧が揚州で牛僧儒の部下でいた時、職務以外は毎晩というぐらいい妓樓にさがり都会の魅力を満喫していた。

杜牧の身を案じた上司は衛卒を派遣し、尾行と監視を続けさせていた。まさかそのような事とも知らない杜牧は何年かの後、待御史となつて長安に召還されることとなり送別の宴を開いてもらった。その席上、僧儒は「貴君は氣持が闊達かたたくでどこへ出ても成功する力を持っているが、心配なのは風流にふけり過ぎて健康を害さないか」と問うた。

杜牧は上司が自分の私生活を知らないと思つて「平生からふしだらにならないよう氣をつけています」と答えた。僧儒は笑つて、杜牧が毎晩妓樓にあがつた行動を、衛卒が提出した日報を見せたので、たいへん愧じ、且つ恩誼を謝し終身心に銘じたと言う。

鑑賞

起句は夜霧が寒々とした秦淮の川面にすっぱりおおうように立ち籠め、月の光が砂浜をおおうように白々と注いでいる。この句の良さは籠めるといふ字にある。名詞では「かご」という意味で、それを動詞に使うと「かご」でふたをするように「おおう」という意味になる。目の前の自然現象を詠いながら夜霧で月の光をぼかし、淡いスポットライトの中で実は、過去の歴史をもおっている様な気分させる。それは後半二句への懐古の趣きをなす舞台づくりのようである。

承句は夜この秦淮に舟泊りすると、向こう岸には酒家が並んでいる。古い都の趣きをなした街並、今夜も灯火をつけた青楼から静かな音色がしっとりと流れてくるのが聞こえる。憂愁古都の秋の夜の風情をかもしだす様である。

転句は前半二句で夜霧のぼかしで過去の歴史を「おおう」ことから一転し、史実を明確にする場面転換である。亡国の恨みの歌とも知らずに商女が歌っている。（今ふうでは芸妓、歌姫である）

結句はその歌とは陳の後主の作った「玉樹後庭花」と言う歌である。陳の滅亡を象徴するこの歌を、商女が歌の意味を知らなければ知らないほど歴史の彼方にある古都への深い憐れみと懐古の情を思い出させられる。